



弗措先生傳及遺稿

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5

始





弗措先生傳及遺稿

大正
11. 6. 10
內文

曾相暨子批卷文暨子
夫之公孫不得一為重
福受難斗酒吊孤嫠

丹山仙居源定此指長余之入其堂外指之在酒亭大日時幸草履
承此子生名弗指長余十載矣云

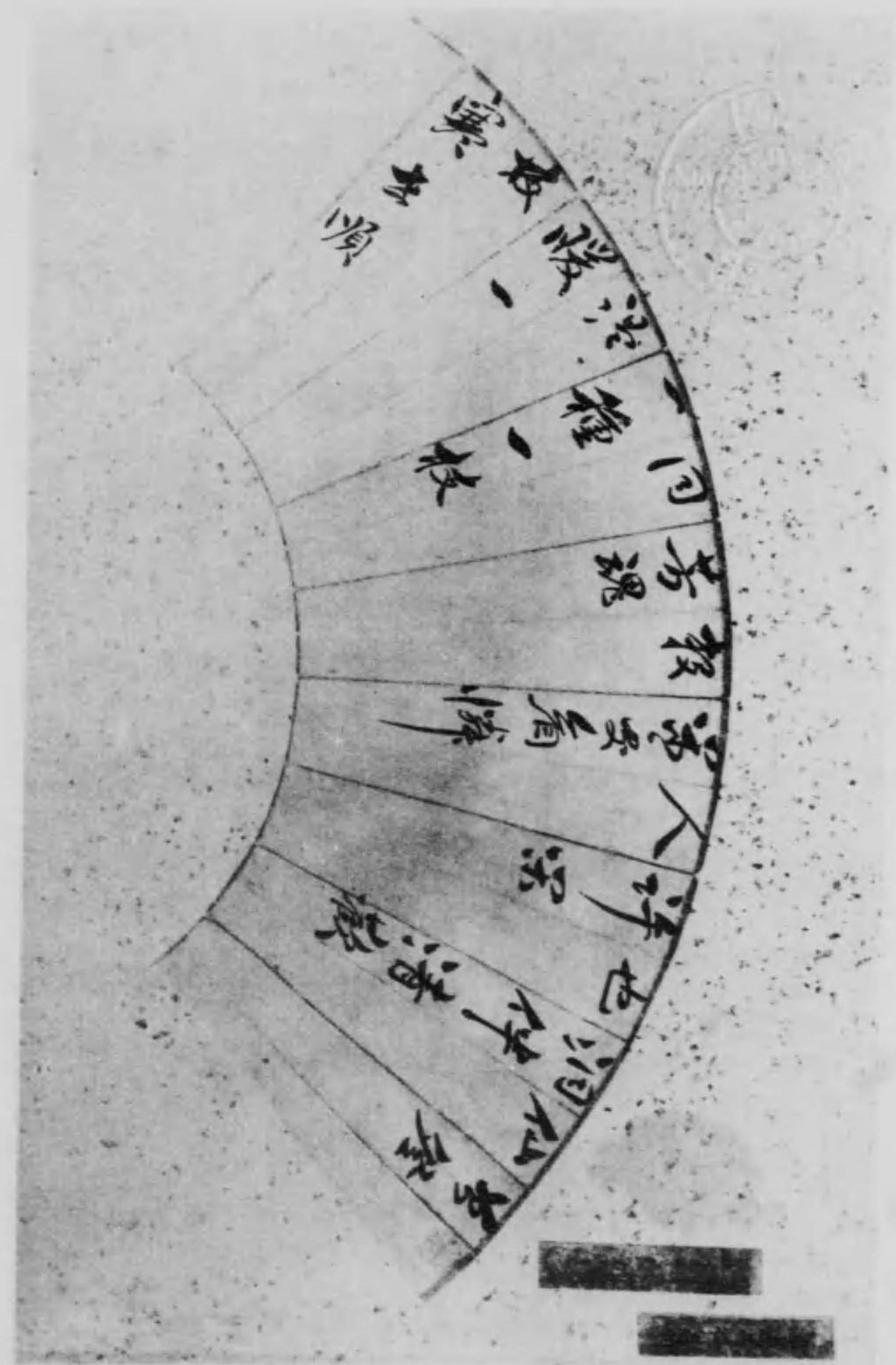
或爾偉



所 墓 山 地 王

死 灰 枯 木 病 魔 纒 濼 例
 何 堪 向 大 都 好 箇 松
 筠 守 為 岸 莫 人 收 宅 寄
 殘 軀

明治十三年病中
 福居若菜
 生問 隴中居士頓



序

渡邊弗措先生物故以來既に三十五星霜を経たり予幼時先生の門に入り慶應三年先生の青山侯に扈從し江戸に祇役せらるゝに従遊し前後六七年間其薰陶提撕を受くるや極めて深し先生資性醇厚忠直夙に猪飼敬所翁及昌平校に學ひ學問該博文章雄健を以て頭角を顯はし當時碩學鴻儒と譽を駢へて學界に馳騁するの概ありしと雖先生の志は寧世道人心の經綸に在りて雕蟲推敲の末技に在らず敢て學者を以て自居るを屑とせず隨て門戸を開きて廣く學徒を招徠せさりしに依り後進の其門に及ふもの極めて寥々たり其名聲の汎く天下に著はれさりしは蓋之が爲めなり洵

に惜むへし及門の士關德君其事蹟の遂に湮没に歸するを
憾み頃者遺聞を拾收し一小傳記を著はし將に印刷に附せ
んとす予深く其用意の深切なるに感し爲めに一言を題す

大正十一年初夏

門人 田 健次 郎謹識

緒言

一、弗翁舊門弟相謀り翁の偉蹟を後世に傳へんとし其編輯
を余に託せらる然るに之が資料と爲すべき記録及詩文
稿の如きは再三祝融氏の爲めに奪去られ或は多年間に
散逸して現存するもの甚少し只纔に舊藩書記局に在り
し舊藩士由緒書の青山家邸に保存せられありて之に由
り翁の舊藩に於ける官歴を精確に知るを得るのみ故に
今之を根據として或は殘闕の舊記に搜り或は生存の故
老に聞き又親戚に質し知人に諮ひ苦心慘愴以て漸く本
編を成すを得たりといへとも要是崑山の片玉たり滄海
の遺珠たり未以て其學問の偉大を發揮するに足らず所

謂之爲すは猶已むに賢れるものか

一、遺稿の詩、律絶百餘首、雜體文數篇、或は之を故紙中に得、或は之を人の傳寫に得たるもの多く中には其未定稿に屬するものもあるべく、玉石混淆、今一々甄別するに由なし、而して翁の志は德業經世に在り、詩文の如きは固其緒餘のみ、即雕蟲の末技として多く顧みられざりし所、毫も之を以て其眞價を輕重するに足らざるなり

一、詩文は得るに隨ひ之を録し、其年次を細查するを得ず、故に少壯年作、晚年作、前後錯綜し、排列順序を成さず、和紀從遊記は其少年作、偶之を或人の手に獲たるを以て亦附記す

一、本編收録外、猶其搜索の及はざるもの必多きを知る、他日之を得て、或は更に追補するの時機あらんか

一、本編編輯に關しては、其高足弟子田健次郎君に多く謀る所あり、資料亦同君の供給に出つるもの尤多し、其他有井武之、介川崎精之、介塚協門、藏林利幸、廣石貞二諸氏も亦其資料蒐集に斡旋せらる、此に深く謝意を表す

大正十一年壬戌夏四月

編者識

弗措先生傳及遺稿

門人 關德 編

弗措先生傳

先生名世順字伯信渡邊氏通稱亮太郎弗措は其號又隴雲居士と號す父謙十郎母長澤氏文政元年戊寅十月八日丹波篠山に生る幼にして穎悟讀書を好み口に上れば即誦を成す其家世篠山藩の小吏たり先生に至り文學を以て家を興す天保三年壬辰四月始て京都に出て猪飼敬所名彦伯字希文近江の人帷を京師に下す當時に就て學ぶ年十五時已に才識俊拔嶄然頭角を見はす

門下奇童の稱あり敬所甚之を愛し視ること猶其子のごとくす大鹽後素通稱平八郎大阪町奉行與力にして陽明派の學者なり敬所と親善なり京阪の間相往來して經義を論す後素の來るや酒間必先生を座側に置き疑難を發して之を試む先生應對明敏毫も滯滞せず後素大に歎稱す京都に在る數年典醫福井丹波守と相識るに至る其家多く書を藏す先生就て讀む嘗て廿二史を借覽し詩を贈り之を謝す其詩頗巧妙別項遺稿中に在り時年十六敬所縉紳家の請に應し往て經義を講す事故あれば必先生をして代り往かしむ其信愛せらるる此の如し其業年と共に進む偶藩公の耳に入り三人扶持を給して學資を扶けしむ天保五年甲午十一月二十七日先生の家固より富裕ならず父謙十郎氏先生の學資

を辨せんごしては頗心勞を盡されしが此に至りて其支給の道を得て大に安んずる所ありしならん然れども先生天資英邁毫も窮乏を以て意を爲さず嚴冬未曾て棉衣を襲ねず深夜燈下獨書を讀み會心の所に至れば腕を露し案を拍ち快を呼び復飢寒の其身を襲ふを覺へさるものゝ如し大凡異常の奇窘常人の視て以て痛苦を爲すもの先生之に處して夷然たり同九年五月更に二人扶持を増して都合五人扶持させらる此時に當り先生勤學の功益積み其業大に進む天保十二年辛丑十二月十九日文學上達に付思召の旨有之新規獨禮藩士の資格は給人、獨禮、小役人の三者に大別すに召出され擬作米八石三人扶持を賜ひ藩校教導方を命せらる是生家を離れて別に其

家を立てたるもの當時の藩制に在ては實に非常の特典なりとす時年二十四此頃まで猪飼塾に在りしなり是より日々藩校に出て經史を講し專一藩子弟の教養に任ずること數年弘化四年丁未先生年三十此時先生學殖富瞻造詣已に深く一藩の矜式する所となりて任重く望高く其地位全く定まるこいへとも猶以て自から足れりこせず深く思ふ所ありて三年間の暇を請ひ此歲四月江戸に出て佐藤一齋の門に入る當時海内の宿儒經學文章を以て名を馳するもの首として一齋を推す先生の自から撰て其門に入るもの亦大に見る所ありしなり此間常に筋違見附内の青山家上屋敷に在て其餘暇には邸内子弟の教授に従ふ翌嘉永元年戊申二月偶祝融の祟

に遭ひ書籍詩文稿其他衣物一切烏有に歸す此歲四月請ふて昌平橋學問所即昌平校聖堂若費とも稱すに入塾して益斯道の精微蘊奥を究め猶四方の才俊とも周旋し翌二年己酉三月修業して四十日間水府に遊び藤田會澤等當時の諸名流と深く交を結ぶ蓋先生心深く期する所ありて此行を試みられたるものゝ如きも時偶幕府の末造天下將に多事ならんことるの形勢に陥り其竟に爲すへからざるを察し意を功名に絶ち同年十一月君公忠良に扈して藩に歸る時に其學問文章老熟鬱然一家を成す翌三年庚戌二月八日教導方より進みて學士添役學士ハ藩校第一の職名添役は副といふに同じを命せられ隔日藩校に出て經史を講す同六年癸丑六月世子忠敏侍讀を兼ね安政二

年乙卯三月十五日追々學術相進且勤向出精に付格別の思召を以て御給人に取立御宛行御直拾人扶持に爲され御儒者仰付らる藩制御給人に至り始めて士分と稱せられ玄關を構へ槍を立て馬に乗るを得るものとす時年三十八翌三年丙辰三月廿日江戸在勤中篠山自宅類焼の難に遭ふ同五年九月殿中月次講釋を命せらる同十一月江戸御上屋敷に在りて又池魚の災に罹る此に至りて火災に遭ふこと凡三回に及へり元治元年甲子五月十五日多年の勤勞に依り拾人扶持を新知高五拾石三人扶持と爲す慶應二年丙寅六月十三日御進發幕府の長州征伐を云御供として大阪に到り御取次兼御使役を命せられ同九月十九日郡奉行道奉行兼勤御儒者故の如く明治三年更に督學に任せられ專一藩の學政を

提理す斯くて廢藩置縣に至りて止む

明治六年癸酉二月先生攝州伊丹に遊歷偶其地豪家小西某の請に應し留りて其郷學を督す其後明治十年篠山中年學舎設立に際し青山忠誠公の命に依り伊丹を辭し歸りて其教授の任に當る翌十一年八月中年學舎の公立中學校となるや本校訓導に任せられ同十四年辭職十五年二月兵庫に遊び同地有志者の爲めに強て留められ已むを得ずして遂に之を許し同地明親小學校に倫理を講し或は地方有志者の請に應して經史を説き諄々倦ます後神戸師範學校一等助教諭に任せらる元來明親小學校は明親館と稱する兵庫唯一ノ學校小學校創以前にして明治の初に姫路の鴻儒菅野白

華を聘して其教頭と爲し同地の子弟に教授す白華は先生
と共に曾て昌平校に學へるもの後十餘年にして其友人の
先生來り亦其教職に膺る兩碩學相續て此に教授し前後双
璧相照す亦是何等因縁の存するものあるが如し兵庫教育
沿革雜纂は之を誇て曰く

明治初年菅野白華先生を聘したる兵庫の地は後又渡邊
弗措先生を迎ふ其動機の一にあらざるも我兵庫の人士
が學を尙び道義の養成に着眼せしことを知るに足るへ
し實に我兵庫の人士は神戸市に於ける教育上の先覺者
と謂ふべし

先生性澹泊寡欲其志高く功名富貴勢利の外に超脱し日夜

斯道講究の外復他意なし其經義を講するや主として舊說
に遵ふといこへも必しも株守せず汎く古今に出入し百家
を貫穿し融會浹洽大中に歸す而して音吐暢朗理義精明能
く人々の肺腑に入らしむ故に聽者皆饜足敬服す

先生の師猪飼敬所の學は伏原宣條明經博士
宣香の子巖垣彦明の系

統漢唐註疏に基づき諸家の註を參取し
斷するに自己の見を以てするものに出て專考證の學を唱

へ別に一家を成す先生の學亦其流派を汲めるものあら
ん然るに幕世の制度として諸藩校は皆朱學に據らざる
べからざるを以て先生も陽には朱學に遵はれしなり佐
藤一齋の如き陽明派なれども幕儒として敢て朱學を
排するを得さりしに同し

先生の江戸に在るや重祿を以て他藩に仕ふることを勸むるものあり先生曰く老親國に在り且藩君禮遇備さに至る安そ能く君親に違ひて故國を去り名利に従はんやと固辭して従はず又一縉紳あり業を都に開くを勸む先生笑て曰く吾豈虎威を借りて名聲を博するものならんやと峻拒肯んせず

先生平生の著作哀然冊を成す然るに前後三回一回は篠山の二回は江戸の火災に遭ひて全く灰燼に歸せり先生毫も愛惜の色なし其意謂らく雕蟲末技何懷に介むに足らんご後再作の志ありしが公務繁劇の故を以て未及ふに暇あらず後頗間地に在て其暇なきにあらざりしも病軀且老憊に及びて遂に果さ

す是に由り先生遺稿の全きものは固より其斷葩片鱗を得んごするも甚難し洵に惜むべきなり

藩主忠敏公世子たりし頃より先生其侍讀たり公の世を襲ぐに及び先生特に寵遇を蒙り公東觀の時は必扈従す故に學成りて歸藩の後さいへごも屢出府し江戸在勤を多しごす而して其交遊の士甚多し鹽谷宕陰、安井息軒、芳野金陵、藤森弘庵、齋藤拙堂、牧鱧齋、土井孳牙の如きは最其親善なるものにして皆當時の名碩なり菅野白華、重野成齋安釋等は同じく昌平校に在て深く相交り常に先生に推服せし所なり

成齊の先生碑撰文白華の弗措精舍說別項に在り

先生の博識強記は一世を擧て皆傾倒推服する所なれごも

其人ご爲り雅澹清廉敢て聞達を求めず終生山間の一小藩に局促し殊に晩年獨山水の間に遊息し或は徒に授けて僅に衣食を給し以て自から足れりごせられたるか爲め甚世に顯はれすごいへごも其一世の碩學鴻儒たるごは重野成齊の碑文に見るへく又佐藤一齊の意はさりき篠山の小藩にして此儒者あらんごはご歎稱したるに於ても知るへし碑文參照

先生性至孝父母に事へて奉養備さに至る當時以て郡中の儀表ご爲す後二十七にして父を喪ひ四十二にして母を亡ふ皆哀毀骨立觀るものをして感動せしむ

先生の父名世敏字徳夫通稱七郎左衛門後改謙十郎悦齋

ご號す天保十四年癸卯六月故ありて退身し氷上郡黒井に僑居す此退身に就ては遺稿中の七律有感以下三首は正に這裡の情況を窺ふに足るものあるが如く凄慘惻怛の至情言外に著はる翌十五年甲辰九月廿四日黒井に於て歿す此人學問の有無は詳ならされごも其六十の華筵に當り先生の需に依り各家より寄祝の詩歌中に奉祝悦齋先生六十又奉賀悦齋先生六十爲徳夫渡邊君六十賀寄題渡邊斜好亭等の文字を見る其號あり字あり又斜好亭の亭名などより推せば尋常俗人にあらざるが如く但其詩歌題多く松竹鶴龜等に寄せ之を壽したるものにして一も經歷に涉らざるが故に之を詳にするに由なし然れ

ごも先生に幼少より學問を仕込み之をして後の大儒たるに至らしめたるは先生の天資に得るものありごいへごも亦其父の嚴訓に由る所なしごせす今之を徵するの舊記なく之を質すの故老存せざるを以て姑く推測のみを補記するのみ

明治十八年乙酉三月六日病て兵庫に歿す行年六十七同地湊川の西新川墓地に葬る門生相謀りて碑を建つ重野文學博士其墓に書して弗措渡邊先生墓といふ翌十九年門生等又別に篠山王地山に一碑を樹つ重野博士又其碑文を撰す碑は大雲川に面する所に在り先生の兵庫に在るや常に郷里を思ふて曰く吾は當に雲川漁夫と爲るへしご因て此地

を相したるなり配箕原氏名滿五女を生む嗣子なし同藩平野市兵衛の三子房之助名世を養ひて長女陽に配し後ご爲す陽年廿四先たつて死す依て第四女閨を以て後配ご爲す年廿二死第二女勝同藩山崎矩員に適く第三女常園田亮八に適く年三十三死第五女元佐藤彌太郎に適く年廿七死房之助亦先たつて死す年三十七一男一女あり男朔太郎名世年三十三死女靜年十九死此の如く其子女及孫多くは皆早世し獨先生の配箕原氏は八十四の高齡を以て明治四十四年九月十日京都の僑居に歿す第二女勝猶生存す朔太郎妻章江名一男一女を生む男弘天名女益子一旦相續戸主ご爲り更に攝州三田有井武之介の二子望二女勝の女榮の生む所即先生の曾孫を迎へ

て養子とし益子に配し以て後ご爲す望今陸軍砲兵中尉たり

逸事

先生の傳記以外に得たるものを逸事として此に追録す先生の昌平校に入るや學問文章儔輩に凌駕せるを以て程なく舎長に擧げらる薩州の重野安繹亦來る先生より少きこと十歳餘曾て文章の批評を需む先生一讀將來大文章家たるへきを豫察し評して曰く時無英雄使豎子成名果せる哉重野は維新後文壇に霸たり先生歿後即明治廿一年修史資料蒐集のため山陰山陽巡廻の途偶篠山を過き先生の墓に展し一詩を賦して懷舊の情を叙す其起承に曾將豎子批

吾文。豎子頭毛已白紛の句あり

詩は卷頭及附録に在り

維新後重野安繹内閣修史館編輯長たり先生の博學にして世に顯はれざるを惜み曾て書を寄せ其上京を勸む先生已に意を仕進に絶つ故に辭して赴かず明治十三年病中移居の七絶中に死灰枯木病魔紆潦倒何堪向大都の句あり

詩は別項

遺稿に在り想ふに或は此時の感想を詠せしものならんか

天保年中其師猪飼敬所の藤堂侯の聘に應し賓師として津藩に赴くや先生亦從遊して齊藤拙堂土井馨牙石川貞一郎川村貞藏等と交を締へり一日大鹽後素大阪より來りて敬所を訪ふ時に東海近畿大飢饉の際なりしか先生敬所の意を傳へて曰く吾塾饑饉の憂を分つため上下皆菜七米三の

雑炊を食せり粗糲を嫌はされば請之を饗せんご大鹽謝して曰く素より糞ふ所なり但吾僕從輩は元衣食のために吾に事ふるもの故冀くば彼等に給するに普通の米飯を以てせんことをご即其言の如くす別後未一ヶ月ならずして大鹽舉兵の事あり蓋此時彼意己に決して遙に來り暗に訣別の意を表したるものならんご是先生の其後門人に語れる所なり

齋藤拙堂は深く先生の學問文章に服し常に土井藝牙を激勵して曰く京都に渡邊あり猪飼塾に在りし時伊勢に土井あり學界之を龍虎に比す汝須らく勉勵して一籌を渡邊に輸する勿れご其當世の鴻儒に推重せられしや知るへし

ご時を同くして但馬宿南に池田草庵あり丹波柏原に小島省齋あり草庵は陽明派を以て省齋は朱子學を以て先生は大體朱説に據るも實は折衷學を以て各旗幟を樹て一方に雄視し名聲相降らす全く昇足の勢を成せしは當時の偉觀ごせし所而して其博覽強記に至ては二氏或は先生に及はざる所ありしならん

先生の斯道攻究を以て其生命ごせられしごは老後及其臨終の時に至るまでも渝らす平素各室到る處の机の上には必書物ご目鏡ごが置きあり便所にまでも書臺を置きあり病床猶書物を手にして放さず醫師之を止むれごも聽すして曰く是余の性命なり止むるごを休めよご其常に寸

陰を惜みしこと此の如くにして終始一貫せり

先生書生たりし時一着よりなき袴も友人の入用とあれば直ちに貸與へ又自己の入用に際しても他人のものを借用して平氣なり書生中には殆通平素書籍の外は衣物の如き敝履を棄つるが如く總て無頓着又曾て門人の長崎に到りて歸れるもの土産として加壽天羅を先生に贈らんとして此物にては頗珍來り門前に遇ふ先生請取りて深く禮を述べ偶隣家の小兒の泣居るを見て直に之を與ふ門人大に驚き是は先生に召上りもらはんと特に持歸れるものなりといへば先生答へて自分が貰ひしに相違なし故に小兒に與ふるなりとて一向に無頓着其瑣事に頓着せざる率ね此類なり以

て其胸襟の寛濶なるを見るべし

慶應三年先生藩公忠敏に隨ひ江戸に在り公有益の書を翻刻せんとするの志あり先生を介して之を鹽谷宕陰に謀る宕陰は女訓又は古今文致を推薦す乃文致を發刊するに決す先生專其校訂の任に當り雕刻略成るに及び偶維新の變動にて一時遅延し漸く明治二三年頃に至て發刊す宕陰の序あり先生跋文を附す

重野成齊碑文中に藩召君還、橐空不得上途、人又勸告諸侯、獲贖必多、君笑曰、吾不堪煩勞、遂典衣物、不告而發、の文字あり此一條甚疑ふべし何となれば先生の始て江戸に出てしは弘化四年其齡三十の時に在り此時己に八石三人扶

持の宛行米を受くるの身にして毫も橐空の虞なきのみならず他の確實なる記録に據れば嘉永二年弘化四年水戸漫遊より江戸に歸るや其五月某日六月廿一日兩度江戸に於て若殿様御次講釋仰付らるごあり以て其寵遇を蒙りしを見るべく而して其十一月には君公に扈して歸藩せしことは傳中に見ゆる所故に窮措大の如く橐空衣物を典し又諸侯の贖に倖僥せんごするか如きの醜態に出づるの要なければなり是全く傳聞の誤に出でしものご知るべし

野史氏曰古來碩學鴻儒にして時に遇はず坎坷身を終るもの亦多し先生は幼より大儒に就て學び既にして才俊の淵

叢たる昌平校に入りて其學の蘊奥を究め業成りて後は一藩の師表となり藩公に寵用せられ志就名遂げ顯榮以て廢藩の時に至る夫の時に乖き畢生陸沈するものは窮達復に其撰を異にす只其居る所は山間僻陬其施す所は一小藩域是を以て終生局促大に其道を行ふを得ず隨て其名世に顯はれず且屢祝融氏の虐に遭ひ多年嘔心瀝血の餘に成りし詩文稿皆烏有に歸し所謂空名を垂れ以て自見るべきものも亦蕩盡し復天下後世に傳ふるを得ざるは深く惜むべき所なり而して廢藩後の境遇は甚索莫晚年多病殊に其多くの愛子孫を亡ひ人生の不幸を極め其傷心察するに餘りあり前の顯榮ご後の不幸ご相乗除し去りて竟に多く得る

所なきが如くなれども後の不幸は一家の私事なり之を以て前の顯榮を抹消するを得ず況や先生の光霽襟懷毫も窮愁を以て意させざるに於てをや決して不遇の身世を以て終りしものにあらざるなり今傳記逸事を編するに當り其榮悴得喪の事に感あり乃一言を附す

遺稿 詩文

初入京

千古神州王澤開。山川鬱葱氣佳哉。四方輻湊人文藪。孰是洛陽賈誼才。

元旦在京即事

袍笏朝天爛映霞。絳衣士女競豪華。獨有書生異都樣。閑從野水問梅花。

辛酉歲旦戲製

盎然和氣溢層霄。何翅梅花與柳梢。四山雪解青全露。笑我鬢霜獨不消。

安政丙辰十二月奉賀

藩公寶算五十

舞風蒲柳質何軟。趁暖春花徒鬪妍。獨此傲霜貞秀節。一堆凝翠幾年々。

謁湊川席

自一獼猴逞鷓雄。千秋誰復辨真忠。祭儀今仰崇彰盛。嚆矢却推源義公。

十三夜

千秋韻事屬楓宸。橫槊英風亦絕倫。清光一片無今古。對月緬懷詠月人。

侍藩公經筵公折座右瓶梅之半賜之

一詩謝恩

曾登仙洞伴清歡。也許人間處處看。憐殺芳魂同一種。一枝溫暖一枝寒。

題中林竹溪芦雁圖

蘆荻叢中白露翻。尸群相喚唱和繁。誰知孤館秋風夜。先被此聲銷客魂。

將赴嵐山宿植生作

急趁花期入洛城。其那風雨太縱橫。關心徹夜眠難就。聞尽簷頭點滴聲。

寄懷田子勤在愛知縣

昨在武州今尾州。東西官跡任浮沈。只教方寸如金石。不妨身爲

不繫舟。

病中移居答某生問

死灰枯木病癡紆。潦倒何堪向大都。好箇松筠寒水岸。買人敗宅寄殘軀。

舟入神田川

昌黷多年事丹鉛。咫尺茗溪無好緣。今日得成疇昔志。蜻蜓去泛蔚藍天。

自保津川溪到嵯峨作

纔離峽口浪初安。回顧前程心尚寒。遊勝笑吾情未忘。自輕性命貪奇觀。

贈鈴木恕平

千古英雄紙上勳。徒教經海誤紛紛。後生不恨微言絕。濂洛遺風又見君。

詠史

萬騎西行駐馬崑。凌波曾比墮塵埃。誰知一掬香羅小。一轉開元宇宙來。

贈漫遊生某

鵬翼君曾圖極南。一朝習靜寓僧庵。半榻白雲三盃飯。嚼來禪味有餘甘。

雪朝偶製

快雪初晴天恰晨。幻奇何翅樹裝春。峰巒一白都殊態。寒骨稜々來迫人。

淀川舟中

風清月白夜將闌。舟抵澗城芦荻灣。篷夢覺來天岑寂。子規啼度丈夫山。

漢儒傳經圖

中原逐鹿各爭雄。蓋世功名一夢空。孰若保殘傳統力。到今尸祝濟南翁。

甲子除夜作

傷時滿肚感情牽。舉目風雲一慘然。女兒怪問饑年日。椒酒辛盤不上筵。

壬戌冬抄東行途中

四方牧伯赴皇京。儀仗森嚴殺氣橫。誰知羽檄交馳裏。有個白頭

一老生。

鳧川納涼圖

箇々涼棚占碧灣。清流一帶貫其間。月到天心明似鏡。倒涵三十六孱顏。

奉命續貂

明滅紅燈轉寂寥。江樓人去獨調笙。春空人定夜將半。月淡京城三大橋。

新年有感

萍蓬相倚幾迎春。解釋羈愁酒有神。痛切如今無物遣。團欒筵上少三人。

下總道中

大野茫茫抱八州。芙蓉積翠半空浮。身來關左家千里。更向東洋天盡頭。

寄題仰青樓作

盡瘁多年不暫寧。挂冠乍守草堂靈。飽看人世浮雲態。頭上高山依舊青。

冬夜書懷

雄都文物屬阿誰。馳逐詞林彼一時。何知風雪山陰夜。獨剔殘燈刪舊詩。

餞歲

惜別胸懷一帳然。誰言年去有明年。桑榆暮景何期遠。椒酒寒燈獨不眠。

除夜同孫等作依其韻

枯木死灰耄老夫。未嘗道味一臠腴。回頭往事涕沾臆。六十二年真隙駒。

大夫謙席觀某先生舞春雨戲作

轉目搖頭伎不窮。權門納媚術何工。幸然坐上無○用。隨意先生舞八風。

實盛

衣錦從軍拯壯勅。致身平族獨何情。篠原水洗鬢毛黑。不洗斯翁失節名。

偶成

性僻不能追物遷。途窮猶愧受人憐。布衾木枕寒窓底。獨對殘燈

夜似年。

元旦

喔々雞聲欲曉天。已看物色帶春烟。回頭愧我無成業。黃卷青燈又一年。

送安積生歸但馬

孤旅窮經過幾春。庭闈其奈欠昏晨。一夕刀環忽入夢。不辭冒雪度嶙峋。

病中作

熱氣如焰汗如流。乍睡乍驚夢萬周。只怕此身終不起。半途長貽二尊憂。

客寓所感

扈駕諸君皆錦衣。身如病鶴不忘飛。關心最是高堂淚。同去人歸兒未歸。

二州橋雪朝

芙蓉高聳筑波蹲。舉目山河一樣新。快意橋邊塵未起。着他馭背苦吟人。

二月初八夜訪茅齋不遇

玲瓏雪月鬪英華。思茗尋來陸羽家。門外寥寥題鳳去。冷然定是駕雲車。

小春遊大雲途中

聊伴大夫公事閑。孤瓢短杖出圓圓。村蹊幾里乘冬霽。踏破尋常一樣山。

春山讀書

幽棲本與世緣疏。猶覺春光到我廬。半榻斜陽花影疊。香風來捲讀殘書。

江樓春望

幾疊紅雲擁敗家。千條弱柳拂橋斜。漁翁乍向前川去。巨網舉來半是花。

中元

時新祭奠滿盤擎。原上秋風掃墓塋。姑據孟蘭盆會說。修吾追遠肅然誠。

中元觀月

拂衣風自稻花頭。滿地如霜練影浮。一片清涼天上月。中元真個

勝中秋

詠史

忠臣在側帝威尊。其奈艷妻傾紫閣。一去山中間看月。清光浩浩溢乾坤。

還笏逃禪豈所期。片心猶自戀丹墀。山村看月殊蕭索。翻憶當初避雨時。

否極泰來理不窮。感孚克有至誠通。笠山一夜南柯夢。天賚偉人振大東。

籌策不聽心事違。遂教逆豎肆雄飛。臣身碎折毫無惜。惜此皇威將復微。

盡瘁諸公清帝圻。何圖逆賊結宮妃。前狼後虎相中御。坐使忠臣

失事機。

西代澤田氏招飲即事

孔道砥平風捲沙。行々左折訪君家。最佳下物何辭醉。照眼石巖
猩血花。

神田氏延清國領事某於家賞櫻花。余亦與焉。及期

以病不能造觀爲憾。卒賦以謝。

大清名士麗詞葩。來看扶桑第一花。臥病魂飛徒想像。滿園交映
兩芬華。

寄孫世篤赴高知縣

萬里長風破浪行。任吾徹夜睡難成。三竿朝日天將午。知汝捐船
望土城。

一擊圖南羨壯行。何論孤客百憂生。雲程萬里須珍重。好慰老夫
思汝情。

送孫世篤遊學東京

如繡如花英俊群。都門誰不策殊勳。昔人一語要須記。春在技頭
已十分。

偶成

雨洗殘炎清心脾。孤斟偏思對牀時。一腔平昔長虹氣。吐不向君
將向誰。

即事

花雲撩亂水彎環。舟向模糊烟樹間。日暮旗亭人散盡。一簾微雨
見春山。

春仲訪園田成功

回頭時事轉傷魂。何若却屏守華門。只有交情難擲得。一簑衝雨入山村。

桃山懷古

嬰守孤城抗大軍。別時何用淚潛吞。死元臣分毫無恨。未看君定字寔。盪平禍亂挈綱維。好大黠兵何足疵。世間無個英雄漢。大息臨風想當時。

偶詠

蒼顏非復昔。只有老禪盟。愧把千莖雪。對他秋月明。

壬申新正

大雪埋千岳。寒光滿草堂。誰知春有信。餅裡秀孤芳。

就福井國手借覽其藏書以道謝

匙頭技倆萬功成。海內爭傳扁鵲名。乞診士民門作市。遠軒竹樹屋如城。藏書世皆稱金子。許借有人憐邴生。仁術不唯能起死。又教吾輩益才情。

奉寄懷敬所先生四首節三

拜違函丈一年々。荊棘塞胸慷慨頻。納誨懷恩似多雨。成才達德幾何人。三餘業廢嗟居索。寸步難移渾坐貧。敢請聞知英傑事。祖鞭加着欲振新。

八十年來不染塵。方今齒德共無倫。口談千古英雄迹。心學唐虞三代人。敏事自知天性勇。解經誰及此翁真。隨才弟子皆成就。都

見先生德化醇。

藝林豈翹稱無倫。北斗以南第一人。胸納乾坤羅万象。化周海內。贊天鈞。精微覲破河汾駁。明眼洞看鄒魯醇。後學偏欽仁壽久。始知冲澹保天真。

憶某夫子

臥治汲君百世芳。何唯前膝入宣房。猛寬相濟古遺愛。威信兼全國棟梁。發政渾身渾膽略。貽謀令嗣仍忠貞。列藩安得如夫子。默禱招魂對彼蒼。

偶成

潛夫論作事虛冲。寄跡深林五畝宮。愛靜平生渾獨立。甘貧晨夕只双弓。閒庭晴景時灌菊。淨几明窓或課童。此外胸中無一累。凌

風直欲駕長空。

哭某大夫

爲官誰及大夫良。既不茹柔不吐剛。富國強兵當日計。更張除弊百年芳。土人猶致双雞祭。藩主應嗟一鑑亡。列國古今求此類。鄭僑方足共成行。

老將

飛將千載特傳名。百戰忍聞醢黥彭。雪厭陰山旗影亂。月輝黑水角聲清。北胡膽落胸中甲。宋室長依萬里城。誰料灞陵憔悴面。伊吾鳴劍夢中行。

寄京友某

同學由來兄弟行。如今相隔各殊鄉。羨君生長鶯花海。或恐消磨

鐵石腸。螢雪勿嫌燈下業。汗青當傳百年芳。索居久我切企望。時示新篇椽大章。

詠雁

託身紅蓼白蘋洲。嗷々哀鳴不耐秋。棲止常從寒暑轉。往來唯爲稻梁謀。瀟湘夜雨皇娥怨。巫峽淒風客子舟。世態人情總輕薄。愛渠飲啄喚朋儔。

首夏十三夜訪白茅大原君坐間同賦用見示一齋

翁詩韻

不執黃經五日餘。偶然來訪故人廬。綠陰深鎖將團月。燈影同看未讀書。遮莫流言稱市虎。恐他危禍及池魚。坐來談到歡心境。滿肚磊塊渾破除。

首夏訪友人

春去祝融未持權。寒暄晴雨瞬間遷。巖花庭樹開生面。吟榻茶瓶託熟緣。守白難投兒女好。嗜痴賴見丈人憐。相逢談笑何辭數。至竟論交在淡然。

送園田子素從父赴勢州

羨子探春向勢南。風光處々我曾諳。幾堆花柳途如髮。無數湖山水拖藍。居業雖空旬日課。承歡鎮領室家湛。新詩到處囊應滿。只待歸來促膝談。

偶成

微官不絆志如灰。半畝小園春又來。嗅香花底懼驚鳥。刺草幽階奈害苔。粗糲野蔬寒活計。茶烟禪榻好詩材。休嘲詞客全無用。酒

債如山算幾回。

訪石田公彬同賦勒韻

勝景豈堪斗室寧。飄然來叩故人肩。雪侵松樹加蟠屈。月入梅花
競性靈。一片賞心任骨爽。數行杯酒對燈青。境奇詩句真難巧。不
怪吾人口似瓶。

江樓春望

春江波暖水如油。處々風光攢一樓。鳥入紅霞山外寺。人穿翠柳
渡頭舟。抽毫龍眼搜難得。愛靜鷗鷺好結儔。拖紫紆青非我事。此
間直欲披羊裘。

春日出郊

澤國風流元麗容。藍波倒蘸幾青峰。韶華不割江南北。烟靄望迷

花淡濃。瀕水旗亭帘影閃。印沙遊子馬蹄重。江樓暫欲忘塵事。怯
看放衙數隊蜂。

閏月初五蚰川納涼

趁涼橋上踏斜暉。幽賞忘還坐石磯。數點漁燈輝水閃。無邊螢火
傍堤飛。烟雲遮坐鮮星斗。風露將秋濕葛衣。熟路何辭彎月後。冥
行故就竹蹊歸。

題九江畫夏川萬柳圖

寸祿未拋頭上簪。索居無地洗煩襟。終年閉戶思孫楚。四遠探幽
負向禽。多謝柳絲千縷綠。送輸風水滿堂深。不唯瀟洒驅炎熱。展
觀夢遊償夙心。

漫吟二首

午倦移牀臥竹陰。華胥清境轉相尋。多年久領和光味。畢竟難除
畏影心。流水高山入琴調。青松苦竹擬龍吟。隱淪未脫長虹氣。論
世自疑求賞音。

四十餘歲事忠貞。末路何圖老客程。陰雨淒涼離國淚。愁雲黯澹
掛冠情。新知迎待碁詩戲。素性元兼水雪清。明主深仁容再任。考
功不讓首魁名。

有感二首

茫然知是絕歸期。泣血剖腸切慕思。重義厨無三日貯。教兒家有
一經遺。茅廬秋草承歡日。荒逕寒花拜別時。昨夜分明陪宴夢。儀
形依舊認鬚眉。

小心翼翼有人知。誤觸刑羅極痛悲。信友自甘分厥罪。訓兒唯謂

報君慈。趨庭期做徐生志。遠省聊擬王勃爲。海岳鴻恩罔極恨。萊
衣愛日嘆違時。

甲辰中秋前一日奔病、夜護柩而歸葬

忍看一封細報知。愕然登路且星馳。惜陰常失承歡日。奔病方辜
屬纊時。五刑三千誰首罪。書燈渾莫不深慈。恍茫疑是夢中事。月
夜愴然護喪歸。

偶成二首

一片區々豈偷安。丈夫報得所天難。黍雞聊作先塋祭。菽水時辜
膝下歡。落葉雁聲歎。睽隔燈光月影夢。團圓掛冠何日素心遂。北
望烟雲路杳漫。

草舍依然人事非。招魂忍撫舊裳衣。空梁一日燕飛去。華表千年

鶴不歸。投老聊謀棲隱境。終天長貽罔窮歎。猶知所在人心屬。欲說遺言淚自揮。

中秋觀月

三五夜中明月圓。平安城上溢清寒。九重臺閣連民屋。萬里江山轉玉盤。簫笛聲牽千古感。銀河影閱幾人看。臨風歎息飄零久。客裡秋光四歲觀。

秋夜偶成

風高天朗屬清秋。烏鵲橋頭喜氣浮。粉席金盤人乞巧。雲階月帳話離愁。凌空難遇駟車下。厭世無由駕鶴遊。依舊仲容家四壁。腹書欲曝上高樓。

立秋

偏驚節物忽移推。大火西流斗柄回。不是陰蛩叢裡泣。爭知玉宇爽颼開。掃空老燄風無力。映日峰雲山覺堆。何事家娘大早計。剪刀已是夾衣催。

即事

澄空爽氣碧如油。窗外光陰附逝流。月苦風淒鴻有信。霜嚴露冷樹知秋。登樓誰抱王粲志。驚世徒添宋玉愁。何日脫離名利窟。翩翩萬里上滄瀛。

賞菊

千年知己有柴桑。隱逸群中獨擅場。金運鍾精具五美。黃中開萼託重陽。清莖不管繁霜壓。勁節由來百煉剛。蛺蝶何爲無賴甚。漫教俗客認幽香。

贈某

主公愛竹翠成堆。應是嘉平辰日栽。憂玉飾金生變態。虛心勁節絕塵埃。子猷豈有終朝負。蔣詡只容三逕開。自古高人兼韻士。清風猶見此君推。

閨怨

萬里睽離歲月遙。鳳凰山下羽儀嬌。嫁衣豈爲他人製。怒罵偏縱鄰客挑。寒帳空牽孤燕感。新歡不管錦文招。無端昨夜關山夢。仍舊諧娛貽握椒。

邊詞

朝受黃旄出玉關。片心誓破匈奴還。霜侵戍堡刀光苦。月照沙場戰血斑。虜騎千群空匹馬。威名一矢定三山。功成何用磨厓勒。萬

世口碑麟閣班。

秋夜宿漁家

月宵投宿水邊區。恰是丹青一幅圖。潮浸芦灣矩艇泊。雁啣秋影遠空趨。終無物色來嚴瀨。一任烟波屬釣徒。世路更慵貪餌食。忘機長欲老江湖。

秋日山居

一丘一壑思難忘。紅葉青山築艸堂。吟月呵雲塵外適。澆花琢句靜中忙。行藏豈暇開青眼。窮達由來任彼蒼。唯有溪流解心事。從他世上喚爲狂。

客夜登樓

萬里高樓憂思深。百年光景易駸々。秋風梧井傷搖落。夜雨蕉窓

驚客心。唯有雁聲橫碧落。更無鯉素報鄉音。孤身餘得長虹氣。微醉聊成梁父吟。

送勝野子戍浪華

匹馬双刀行色浮。故人南戍攝城頭。離魂多淚推難去。前路嚴期挽不留。幾個英雄原上草。千年聖主古陵秋。滿城到處渾詩料。瑤玉請無愛暗投。

送山崎生

從學多年見志優。何人能及子風流。吟哦平日評風月。征戍如今就宦遊。探勝足徵今古史。迷花勿倚翠紅樓。浪華城裡周年役。匪懈應安陟阼愁。

客夜聞砧

入秋遊子客魂驚。忍聽家々砧杵聲。一隊悲鴻來北地。無邊霜月滿京城。羈心頻切無衣嘆。竹帛豈期身後名。戍役天涯千里夢。分明昨夜上歸程。

秋日寄懷佛玄上人

正始風流物外心。上人能獨嗣遺音。講經机上來獅吼。得句囊中總萬金。聞道支公希好友。許不立度挈朋尋。紛々塵事如麻蝟。每一相思俗慮沈。

秋夜書懷

早將窮達付天翁。豈向秋風嘆病躬。幽泣匣中三尺劍。悲鳴雲外數行鴻。桑弧未報四方志。松栢尤欣後凋風。囊底猶餘封事在。當途何日獻明公。

聞濱松侯再叙首相次林祭酒韻
鹽梅手段絕群資。今日除君復屬誰。一世重刑爲怨府。千秋青史
有人知。夙聞大國小鮮戒。難奈官民巧詐滋。更祝三年成業日。收
羅英傑野無遺。

七月念五蚬川觀烟花

鬪奇烟火術多端。講武還供士女觀。雲黑一聲飛電閃。星明天外
老龍蟠。周王枉買驪山夢。漢室漫驚邊塞官。撫古尤知清世樂。從
容談笑啣杯看。

贈佛彥上人

飛錫曾窮東北陬。介鱗海裡泛慈舟。心將人世爲泡夢。跡與間雲
任去留。泉冷室無三伏熱。山深窓納十分秋。談玄佳會風塵碍。杖

屢欲探紅葉幽。

牽牛花

青天失馭七香車。落入尋常百姓家。幽艷曾無經日蕤。多情又有
每朝花。金風聲裡紅姿亂。翠竹籬邊紫蔓斜。殘月猶明人未起。臥
看碧影印窓紗。

送鈴木參政赴召江戶

膽力超群許國身。坐氈不煖不無因。廟謀欲講更張政。封事無如
召對真。雨破五十三驛夢。花殘八百八街春。才優劇務猶餘靜。每
遇佳山弄舌唇。

九日登高

窮客頻驚節序催。強携少長上高臺。飛鴻影入長空尽。秋水清兼

澎氣開。心事空懷陶令節。詞章難趁少陵才。滿腔慷慨不除得。排悶且銜黃菊杯。

偶成

告暇身如鷹脫鞵。盪胸碧海坐凝眸。千層雪浪兼天捲。一點青螺拍水浮。望斷雲端孤雁影。機忘江上白鷗遊。雕文孰似掣鯨手。大筆揮成五鳳樓。

夢歸家

無復夢魂登鼻鐘。數厨書帙一藤筇。貧家儲蓄千金帚。遲暮興懷三逕松。倦鳥將雛投密樹。歸雲帶雨入層峰。對床更有同心友。徐品山姿與水容。

載德記序

同一栽培也。菽粟孰與花卉之璀璨。同一織紵也。布帛孰與錦繡之雕麗。而有志之士寧舍彼而取此者。以其適用與否也。史編者典籍之菽粟布帛也。本朝實錄亦不其最切實於我者乎。儒者陋習終身矻々。其取鏟腎錄精率皆空文浮詞。否則區々耗精異邦之書。不知本邦史編之爲何。是何心也。自史官曠職。而野乘輿有志者不得不取給於此也。古者古語拾遺紹運錄以下諸編指不勝屈。輒近列藩記載頗具。其尤著者。則水府米澤肥後會津之言行錄是也。其君臣遭逢勵精圖治之狀。使讀者感憤仰慕欲爲之執鞭。如此諸編。所謂菽粟布帛可以垂萬世。供他日史氏之採擇者也。如我藩分源花山文貞公。當南朝之時。敵愾勤王。有若藏人

佐公及神祖勃興。挺身殉難。有若忠世忠門二公。如夫泰雲公之直諫。致身蟠龍公之興復舊物。及見龍公之卅年太平宰相。其忠勇節烈。豐功偉績。千載之下。感憤人心。何以減彼四藩侯哉。而記載不具。事或無徵。可勝慨乎。雪江二木翁有見於此。拮据經營。遂成此編。行以國字。名曰載德記。文撲事覈。令我藩奕葉遺風餘烈。因以不墜于地者。翁之力也。其酬國恩惠士林。豈曰淺少哉。吾閩世人撰輯之書多矣。有璀璨如花卉者。有雕麗如錦繡者。至比布帛菽粟而無愧者。則憂々乎無聞也。如此編。庶幾得之。翁恒曰。煉精力。猶汲泉也。汲而不止。清冽全涌。不竭已力。而諉以事望。則咎井而求其冽。不亦難乎。其用意如此。宜乎其職劇心間。操觚記事。能知所擇也。抑此舉宜出吾輩間散書生。而成劇職要人之手。將

置吾輩於何地。與言至此。感愧交集。遂書以爲叙。

安政三年作

題室鳩巢先生尺牘并茅渚八景七律八首書後

是爲鳩巢室先生墨蹟。而兵庫縣令神田孝平君所贈也。君負有爲之才。膺一方之寄。而胸襟洒落。好學下士。好官員也哉。聞唐金生昔爲泉南富戶。今已式微。其俗牘固先生所賜生。而七律八詠亦爲生作者。不知生有何所長。而得先生值遇如此也。先生志之所注。在德業器識。末視文藝。况區々筆札乎。故此書運筆無法。或致點畫錯落。今世學者。率多趨末遺本。見其如是。深生愕異。不足怪也。禮不云乎。德成而上。藝成以下。有爲者以當如斯。宋時一貴紳欲招致諸講官。飲茗讀書。伊川先生獨不往。曰。某不飲茗。不解書畫。先生之於書。意當如是耳。但其背馳時好。乃足觀偉人一節。

亦可謂吉光片羽。先生道德文章爲百世領袖。今不復贅。特推筆札所以粗率。發其志向。以爲子孫示方嚮。如是爾。 明治九年作

書迎薰室詩卷後

卷中所收諸作。皆爲當世聞人。公紀君遨遊諸名流之間。請而得之歟。抑詫他人而所得歟。何其豐富如此也。君爲亞大夫。班騎將。奔走東西。當要務之衝。所謂不遑寧居者。而優遊翰墨。如風流隱士所爲者。其胸中恢々有餘裕可知也。惟其有餘裕。乃所以處劇不亂。百事咸當。古者有爲之士。所不可及者。君其庶幾乎得之。今督學重裘君爲其後人。頃示此帖。請跋言。因書所見還之。君其自省果爲如何。嗟乎。是昔人娛心怡目之具。今乃爲吾輩驚心惕魄之戒者乎。 明治二年作

篠山中學校碑陰記

是芳野翁爲從五位青山忠誠公所撰。公以故篠山藩知事從四位忠敏公介弟爲其後。首興私學。獎勵藩士民。使其知趨向。於是乎有此記。客歲七月。請官改其私學爲公立中學。體制一變。學政大張。舊私學社員數十人。目其漸盛。感往日之基始。曰。不啻誰能構。不有濫觴。何見波濤洶湧。寒鄉僻邑。非公捐貲首唱。誰能開基。嗚呼。今日之漸盛。其有所由來也。嗣今有才俊輩出。雖教育所致。未嘗不由私學爲之先茅也。乃胥謀刻此記于石。以垂不朽。乞余記之。蓋亦原始要終之意也。顧旣已有此記。余復何贅。特叙社員綵繡之深。所以有此舉。以付之。使刻其碑陰。社員者皆舊藩士民也。 明治十二年作

並河聽雨墓碑銘

君諱金保。字秋卿。並河氏。聽雨其號也。世仕篠山藩。及龍興維新。任藩屬司農政。後教授終身云。初屬武門之末造也。庸碌者挾門望驕人。加以媚愼。君處此間。恬然樂易。毫無嗟嗜。酒好書。出語諧謔。得上下歡心。而終不詭於正。頗有東方朔郭舍人之風。宜躋上壽也。惜哉。罹病三月。溘然長逝。實明治八年一月十日也。距其生文政二年。享歲五十七。前配生邦彥。及二女。先君歿。繼娶。二女適人。邦彥嗣。銘曰。

不知者以爲鄉愿也。其知者以爲知分也。乃君則玩侮世之麒麟。植以爲區々不足較尺寸。是其所以終身不慍。无悶。嗚呼。其跡則謹信。其心則不遜。世人不知。吾直指其蘊。

蠅說

蚤生于綿絮垢膩之間。其貌至小。而具極猛態。其背至利。嚙入肌膚。使爬搔無暇。不能安寢。雖王公不能免。及其捫之。覓之。挺身跳去。或匿于壞絮。或逃于深縫。捫之無跡。使人倜然切齒。不措。而無如之何矣。嗚呼。亦巧矣哉。然及其嚙。血已多。則倚着不動。頽然與死無別矣。當此時。人孰不指爪摩之。凌遲之。以爲快。夫食色貨利。人之血也。禮法節度。人之深縫壞絮也。夫有禮法節度。而不能據焉。一誘于食色貨利之私。浩然不知返。以至喪家殞身。不如夫蚤者。幾希矣。噫嘻。

此處為正文內容，因字跡模糊，文字難以辨認。

從遊記

渡邊

順稿

順在敬所先生塾已三年矣，今茲甲午九月先生有和紀之遊，順與齋藤景定命從遊焉。

十六日齊藤節亭景定父子至自膳所。

十七日鷄鳴出門，先生乘橋，余與景定尾焉。節亭及瀬川梶原諸子送行，自東九條黎明翠靄蒼然，山峯微露，宛如海島。三里抵伏見，諸子飲餞分手，日光閃明，雲烟映帶，於此遊興勃發，抵小倉堤，堤蜿蜒于湖中，凡一里，東望兔道，西則八幡山崎隱見，千斷烟流雲之間，如行畫圖中。三里抵長池村，村盡而堤，堤即木津川堤，川流匹練如帶，東顧鷲峯，峰勢嶮立，霜葉點綴，秋色可掬，路皆白沙，行步瑟瑟有聲，宛然有踏雪想。一里半至玉水，又行一里，舟渡木津川，宿木津驛。

十八日未明而發，會奈良某門主上洛，憩茶亭待駕過而出，抵奈良坂，坂為城和經界之地，踰則奈良屋宇櫛比，肆店鱗次，井井如碁局，抵興福寺，佛塔駢列，其尤麗者曰八幡宮，曰四月堂，四月堂藏觀音佛，八幡宮祀應神帝，來謁者接跡，南至東大寺。

山在其間曰三笠長而卑，翠巖無樹，峯分爲三，望之如列笠三，故得名。右有大佛殿，銅像浩大，魁岸奇偉。左爲春日祠，往昔藤原氏盛時所建，其華表燈燭之富，天下希比。多蓄鹿，云神所使，狎人就食。行人出奈良而西二十丁，抵西京，孝謙帝遜位時所居故名。云過小泉郡山行，野色彌望，四方之山蜿蜒十里，萬城峙然，出于其表。翠黛漆黑，秀色襲人，真造化之尤物。一里抵法隆寺，厩戶皇子所建，環紫數丁，寺寮極多，丹雘粉壁，世所罕見。嗚呼！皇子沈溺異教，勞民傷財，經營梵宇，極其侈奢，如此何也？宿門前旅亭，亭對金剛山，如呼而可嚮者，此夜溫暖如春，明日雨可知。

十九日雨大至，發遲，謁龍田祠，抵龍田川，楓樹數十株，臨川，小山橫截其上，流浮雲曳帶，蒼翠慘澹，風起雲，山峯突出，宛如墜空。余與景定臨眺久之，不覺滂沱之在身也。南一里至達磨寺，云厩戶皇子見達磨處浮圖三層，疎竹隱映，幽致可愛。二里抵當麻寺，堂宇頗宏麗，又行五十町，至八木，主谷氏，谷氏名操，字子正，博學多通，紀和所無。

二十日子正請先生以遊初瀨，先生曰：不若與足下終日筆話，乃使余與景定遊焉。有導者，已牌出八木，南行十丁，吉備村吉備公所生云：又南而平郊，四顧皆山，右爲耳梨山，左爲天香山，南爲畝傍山，翠壁角立，望之如畫。三里抵三輪里，人家頗多，每家曝線麩，所謂三輪素麩者也。三輪祠屋簷茅茨，柱梁素樸，松檜環列，日光穿漏，潯潯有光，宛然皴皴波，左折而行，茅簷數間，往來如織，蓋以今日爲初瀨寺之祭也。抵初瀨川，川水清駛，山翠照映，宛然有佳致。一里半至初瀨村，村民聚杏，有扮戲袴褶者二名，叱咤啓行，戴甲被冑者，騎而雙行，從僕各二十名，如此者十隊，而神輿與側者皆岑帽豐袍，如衣冠人，舞妓俳噱，嘩而行。又田舍一奇觀也。詣初瀨寺，複道重廊，廊長丁餘，蓋他境所無。廊盡而觀音祠堂宇頗美，憩頃刻，取舊路而歸。八木夜主人設宴，且談且飲，獻鰻魚，謂鰻魚土俗所尊，故邦言曰：無鰻魚則鯛云。天下之人以鯛爲魚中之王，若鰻魚則奴隸食耳。而和人獨置諸鯛之上，蓋其俗習之使然也。二十一日與景定遊多武峯，曉出南行，二里阿倍寺，寺置阿陪仲麻呂像，側有石窟二焉，深二丈餘，各置文珠佛，入而喚，則瀏瀏然，水鳴石苔，出而又南一里有棹楔，扁曰談峯大明神，南而登六丁礪崑，側立，溪水注其間，飛沫如珠，沿而上十丁餘，有店，喫飯，溪水至此懸崖頭，激流奔蕩，自店望之，宛如水晶簾，蓋音羽瀧末流，故水勢疾駛尤甚，瀧在路左十五丁，以景定憊甚，不能到爲憾，又登十丁，杉松鬱茂，仰不見曦。

景只聞溪水琤琤宛如入崑洞中使人神骨冷然丁餘路盡而礪深百丈餘兩崖石壁側立如削大甕有橋焉飛矯而高如架空而起者又上數丁石階鱗次而上即鎌足公廡也門廊曲簷翠瓦碧甍所謂簷如奇鶴起廊似羣曲翔者左有十三層塔謂定惠和尚自唐所齋歸材右有勅使殿每年以某月某勅使至焉嗚呼公輔翼天智天皇誅數世跋扈之兇姦皇室中興宜乎朝廷之眷顧人民之來謁長垂千載而不衰也其功之未成也人皆危焉公談笑而成之頌其才之雋曰談峰大明神多武峯即談峰也訪今井氏今井氏與谷氏相善者即導而抵大僧正舍觀書焉未時出取路於岡寺脊陰仄修竹與長松隱映壑谷幽致可愛還入木夕陽全沒

二十二日侍先生讀書醫生山田三純來見

二十三日

二十四日辰牌出八木亭午抵高取食已而行二里六田島芳山道美芳水繞麓奧然有幽趣三町舟而渡夕暉斜射波瀾粼粼如數紋奇彩奪目岸頭人家數十漁師逆旅各相半家盡而川有畧約僑夫謂月望以前水漲橋之上流月望以後水漲橋之下流望爲水勢交替之日此橋爲水勢交替之處故名月望橋奇甚不知何故渡

則芳野山是路甚峻嶮櫻葉帶霜夾路成林煥發爛粲宛如張錦綉帳又上二十八丁左望泉攝諸山右顧勢賀諸山起伏萬態殆不可名狀左轉而十町曰一目千本彌谷皆櫻當春花之時飽冶無比及秋則霜葉丹紅皆偉觀今秋已深雖木葉黃落而其紫翠積嵐又非他境所比所謂靈地無時不可者乎然此處登僅四十丁餘而黃落如此其寒暄之異可知路左有村上義光墓且拜旦泣抵芳野坊坊白雲堆中爲一華潔之坊市佳雅甚投逆旅逆旅皆三層樓蓋因帷而架屋故自爲樓層如此窓下幃幃相接紫烟深鎖無見全體明日將有諸瀑之遊先生豫命靈輿

二十五日曉色動推窓則亂雲簇々山巔微露看漸久山漸露如抽如湧浮嵐青帷畫所不如已而僑夫至先生乘轎五丁抵竹林院有小池焉竹樹環生氣象清華絕有佳致又上丁餘路險望豁紅霞流曳翠烟淡颺梵唄磬聲盡生自其中盤折而上十丁餘有子守祠爲建武年間戰爭之處後豐臣右相再建云堂宇宏麗又上四丁餘有蹴拔塔源廷尉南通之時曾憩此塔寺僧自外銅戶告官府廷尉覺之蹴拔屬戶而逃云自此抵與阪路凡五十丁峻崖懸峙無一點人煙心進足退喉中每作鋸

木聲匍匐而至焉。此爲芳之絕巔。四望頗豁。回顧朝來經過地。白雲彌漫。寺坊竹樹隱見其間。宛如入白銀世界。臨眺須臾而南下遙矚。一簇紅靄粘地而不搖。近而視之。則霜葉丹紅。煥粲耀目。宛有佳致。只恨空谷無人。枉步五丁。榛棘塞路。塗路不通。先生下轎步。余先而披景定尾焉。七八町路稍通。又行二十町。路左有棹楔。扁曰蜻蛉瀑。即左轉而入。松杉鬱葱。氣象窘隘。路盡而瀑。飛下千尺。如數百萬珠璣。一時降下。白光閃閃。奪人目睛。下有盤石承焉。噴射薄激。雪浪奔騰。響如萬雷。咫尺不辨。人語使人悽然神起。激賞移刻。而西十丁至大瀧。奇石萬狀。水注其間。漚而爲旋輪奔沫。如白馬怒立。桴筏過此。必沒數丁而浮。亦一奇。左折而上十丁餘。得宮瀧。即大瀧下流。水勢甚寬。溶溶滔滔。紺碧藍青。水底皆一大巨巖。其衝而起者爲堤。平而長者爲橋。橋上布枯芝。名曰芝橋。過而臨。則遊魚與沙石皆可數。清冽寒爽。使人不得久駐。南則杉松碧籠。道塗黯迷。只聞鳥聲木聲耳。幽翠拂拂。撲人衣袂。二里樹盡望。豁路左瀑流萬丈下。自嶺頭隱見。從地污隆。輕搖浮動。宛如白絹從風上下。即高瀑也。緣葛而抵源。攀樹而臨。則一矚萬丈浮烟線牽。夕光斜照。紫彩萬狀。宛如虹霓互長空。余謂景定曰。此瀑之一矚萬丈。非如官瀧之紺碧藍青。大瀧之疾駛旋輪。非如蜻

蛉瀑之飛下千尺。其景各異。而爲絕佳。則一也。猶我文之韓也。柳也。歐也。蘇也。其趣各異。而垂天下古今。與白日爭光一也。景定曰。比諸書法亦然。路右有勝手祠。爲靜姬歌舞之處。幽鳥數聲。悲哀愴然。可以想靜姬纖纖之歌。一里還逆旅。時已薄暮。二十六日極寒。蓐食而發。北三丁吉水院。爲後醍醐帝駐蹕處。殿閣樓檜。今仍如舊。又十丁藏王堂。輪奐俊構。護良親王曾揚義於此處。過而行十丁。如意輪寺。落葉蕭瑟。溪流潺湲。幽翠拂々。衣袂成碧色。有後醍醐帝陵。且拜且泣。久之乃還逆旅。即出取路來路而下。自六田左轉沿流而下。自此抵五條驛。無人家者數里。川流紺碧。怪崑累々。有突怒者。有堅臥者。有尖者。長者。如奔馬。如盤龍。如箏如笙。爲詭狀。流水其間。奔爲練洄。爲輪激者。飛玉者。墨紋者。水石之勝極矣。加之以竹樹玲瓏。數里皆爲碧琉璃色。宛如行畫圖中。抵五條驛。投森田文作。二十七卓午遊芳野川。文作文平寬輔從焉。二十八日小山良貞遊先生請經。余與景定文平從焉。夜還森田氏。二十九日文作乞先生。又遊芳野川。觀漁。將出。佐野峨山來見。即同行。抵永山寺。後負白銀山。前臨芳水。臨眺頗佳。有鐘謂管丞相銘。小野篁書。二公時世懸隔。不知如

何然隱然古色，非二三百年來物。至芳野川，文作近隣數人，棹舟而至，漁陳筵水濱，飲宴移刻，薄暮上舟而還。峨山邀先生置酒，至二更，懇留先生宿其家，文作從焉。余與諸子還森田氏。

十月朔日晨迎先生而還。

二日寶滿寺招飲。

三日文作導先生上金剛山，蓐食而出，曉霧濛濛，抵近內村，臨眺頗佳，村盡而山險，巖如削，攀葛而上，二十丁水間村，時正亭午，食已而上，十丁有觀音佛，左折而路稍平，喬松摩天，短篠再生，長風颯起，樹僵石飛，寒烈如剪，又上十丁溪谷，深幽絕，厓聳左，爽々無樹，沙石有光，爛々如電，宛怪蛇之所住，名曰蛇谷，五丁，風止雲起，顧眄無路，認雲爲地，踏空欲墜者數矣，丁餘樹密影晦，咫尺不辨，只認沙石之光彩而進，抵行者坊，々主與文作相善，議上大日嶽，使雜僧導焉，行十丁地，平夷可坐，數百人，白茅髻々齊人，日麗天朗，四望開豁，一曠萬里，凡數州山川城邑，盡在指顧之中，播攝之海，縹緲如帶，阿波淡島隱見乎其西，其東則浪華塚粉壁，瞥見紀之高野，勢之高，見對峙東西，如繞山腰者，此山之高，秀于數州可知，千早城趾在山南半里，楠廷尉

所據，以憊不能到，即還，行者坊僧溫酒嘉待，飲宴移刻，取舊路而還，五條驛，夜已初更。

四日議明朝入紀

五日餞宴及已時，佐野小林二翁送至邑外，森田昆弟至待乳山訣別，此爲和紀之界，二里名手紀川，一帶如線，小山聳其兩岸，北曰味山，南曰脊山，薄暮入切畑，林修藏出迎，村外數町，其男大藏往年寓先生之家，今日爲病家所招不在。

六日晨，大藏歸。

七日至九日，皆宿林氏。

十日辭修藏氏，赴若山林修道氏，修藏與門生六七人送至粉川，々々寺佛堂壯麗，來謁極多，亭午抵根來寺，々々外有山，小而秀，左右皆櫻，三月花開，偉觀可想，有豐大閣燒滅之處，礎石陸離，今尙可見，少西有傳法不動觀音三祠，頗浩麗，祠前有一大老松，螺柯萬丈，又偉松，開行厨于其下，食已而行，二里田井瀨，碧水瀾漫，兩岸人語不相聞，舟而渡，竝松森列路旁，自此抵若山，皆如此，左折而一里抵林修道氏，修道氏本爲先生門生，今則一大醫，病客盈門，男淵藏亦先生門下，與余爲舊知，弟敬二

郎年甫十三，頗才雋，善書畫。

十一日遊阿彌陀寺，夕在城北一里。

十二日藩士來見者極多，督學山本氏講官鹽內氏岸氏共爲篤志之人。

十三日

十四日先生講經，來聽者三百余人，自出京未有如此盛者也。此夜擬以明遊和歌浦。

十五日未明有急病者請修道，因不得從焉。期會於和歌拜殿，辰時與淵藏敬二郎諸子從出城下，孔道白磧，路旁皆松，夕皆露根，出地高者數丈，下者不下一丈，蓋颶風撲搏，沙磧散亂，故爾。土人稱根上松，有相生松，根一而枝幹則雌雄交錯，又相生之異者，行二十丁有龜游貌，口二石，皆以形肖得名。有秋葉山，石階千級，階盡而祠前可觀，和歌浦之一方，已覺其景物甚佳。南下而有五百尊者像，尊者異形，位置交錯，王百穀所謂屈指則迷者，余亦戲數至十二而迷，爲發一笑。門外松樹，而三並植。千小岡，名曰鶴立島，二十町抵權現山，和合院院主大僧正嘉待禮遇，去謁東照神君廟，壯麗煥發，盡天下之美矣。拜已，曰：吾輩一笠飄然，以逍遙于雲山萬里之外，其

誰思哉，不可不思。所由來西而數十武天神祠，茅茨朴桷，比諸權現祠，其麗枯實天淵。謂祝融大臣，或謂故紀伊國主淺野氏祭豐太閤，當遷封安藝，恐後來廢祀，改名曰天神。大凡世之所謂天神者，多祭菅丞相，而此天神則異議如此。不知如何南而雜賀崎，海潮浩漾，碧浪雪起，姥冲二島對峙，南北宛然堤坊。西則遙矚阿波淡島之諸山，千絳霞流雲之間，翠黛漆黑，如千點栖鴉，亂噪于夕陽高柳之中。左折而望海樓，樓在玉津島山之巔，樓上臨眺廓快，和歌西方之勝槩盡矣。亦佳境，下而詣玉津島祠，僅丈許，其製大與他所異。祠左有石窟焉，深丈許，石皆粗脆，握之輒碎，如枯木朽條，又其異者，十丁抵拜殿，四柱無壁如樹，修道已來待焉。殿前臨內洋，時潮落沙磧，白素數十丁，皆爲白銀色。名草山盤峙其上，杉柏蒼黃，寺樓點白，中有一林楓樹，霜色十分，殷然如血，布引松繞延于其西麓。於是開行廚，飲宴移刻，內洋潮滿，山影倒映，宛如赤霞紅靄，蒸升于朝氣濛濛之中。山光水色媚然更姿，興味一倍。即舟抵名草山，蓋此間潮滿則舟潮落則步，以爲常矣。今潮正滿，故得舟以濟矣。磯頭皆青樓妓院，歌吹如涌，至紀三井寺，門廊廡樓極宏麗，過大悲院，夕主喜甚，即溫酒嘉待，倚欄而臨，則山光水色極蒼微，和歌數里之勝槩盡矣。但西方則雲烟濛濛，如無涯

岸者久之而夕陽在山，雲影墮水，阿淡之山橫，鋪植立千海之西灣，如銀盤中列青螺，猶遠者讚之五劍嶺豫之櫻山，遠翠一髮，最爲偉觀，至薄暮，即舟而行，四面暗黑，咫尺不辨，只聞鶴唳雁鳴耳，舟師誤方欲入支者再三，抵拜殿，東山吐月，山姿水光，媚然露體，須臾而月影在水，宛然玉龍，風生波動，月影破碎，千輪湧出，如金鱗赤鱗，往來于琉璃瓶中，諸子皆快呼奇稱，余謂曰：物之各安其處，而不知有其他者，如此哉！方來望海樓，以謂風物快曠，而不知拜殿之山水萬態，在拜殿而不知名草山之奇瑰，在名草山而不知有此景致，自此觀前所樂，則如觀海者之小水，九牛之一毛，實極天下山水之奇極，天下風月之美，俯仰萬丈，宜乎諸子之快呼奇稱也，雖然自腹藏天地胸容萬物者視之，則安知又不如吾輩之觀前所樂乎！初更還林氏，十六日岸元恒招飲，十七日擬以明赴岸和田，十八日曉發，如期抵岸和田三宅士毅，十九日觀海干茅亭，二十日景定赴浪華。

二十一日

二十二日石井伯述僧桂谷導余遊牛瀑，曉出城一里抵甲山，々尖而秀，壁立萬丈，不可輒登，過大澤村，四方皆山，霜葉彌望，清紅灑々，目睛眩亂，如入絳霞赤雲中，如此一里而抵牛瀑，回看霜葉之透，迤于一里間尤佳，投本坊，峯崖聳峙，楓樹丹紅，飛瀑墮千其間，直置銀河九天，千机席間之想，已而黃昏就寢，夜深天寂，幽夢一覺，推窗而視，則月影滿谷，浮烟如流，楓樹與瀑流相發揮，玲瓏空明，宛如在水晶簾內，賞翫久之而不覺東方之已明也。

二十三日曉出坊，午後還岸城，是日也先生觀漁，景定自浪華還，談天保山之勝，余談牛瀑之奇，二人相夸，亦旅中之一興云。

二十四日

二十五日

二十六日出岸城，一里至忠岡邑，訪和田齊院，一里至濱寺，松樹蜿蜒于海灣，阿淡之山縹緲于樹間，隱見從樹疎蜜，又一里至堺浦，即爲泉攝之堺，浪華以南繁華之地也，人家材木悉堅牢華潔，非他邦所比，世人所謂京之衣，江都之俠，堺之家者果

不虛。至妙圓寺觀蘇鐵。又觀難波江松。皆其偉者。至住吉祠。謁而左折。取路于阿部野。抵天王寺。佛宇壯大。京師所罕見。自此為浪華。二十丁。抵道頓堀。憩逆旅。黃昏上舟。安如屋。頽臥酣眠。蓬夢一覺。已達伏見。
二十七日午入京。明日為歸期。故無迎待者。只梶原思齋植木伯輓出一二丁。初順發京也。思齋讀通鑑。伯輓讀日本史。二子言已卒業矣。嗚呼。余歷遊數州。不能讀一卷書籍。徒閱了四十有餘之日。實不堪慨嘆也。雖然此行也。日聞先生之德義。兼授山水之勝。則又為一得矣。

附錄詩

龍田

一林霜後樹。紅葉映朝暉。覓句頻經過。霏々落滿衣。

其二

朝暎斜射碧山阿。獵々微風生細波。恰是秋霖新霽後。殘雲猶曳樹梢過。

當麻 有中將姬墓

雲委夙入昭華宮。憐被簧言誤乃身。獨有芳心猶未死。一枝垂柳舞寒風。

多武峰

溪畔孤村日欲曛。杉松鬱茂路難分。乍來棧道清幽處。踏破峯頭一朵雲。

其二

翠壁丹崖盡險鬼。且攀磴道坐傾杯。怪禽鳴叫知何處。聲自白雲深裏來。

芳山

山道更於何處通。滿簑烟雨晚來風。失群踳踳且停杖。後喚前呼雲霧中。

其二

亭午滿門消霧烟。深潭倒映碧峰巔。兩三漁者去何處。家在枯榆翠竹邊。宮瀧

其三

數里望周嵐翠濃。枯柴橋畔又牽筇。一泓寒水明如鏡。照見三芳幾碧峰。同前

其四

南狩變和至此駐。梵王宮古半榛荆。君王歆枕知何處。石澗寒流舊日聲。吉水院

其五

南帝失上策。王業頓圯崩。千載韓蘭英。吊趾情營々。形管有文辭。難追賦中興。秀園

蘭英者來謁。通與韓蘭英同名。因賦示焉。

其六

青溪野史吞聲哭。延元陵前伏荒涼。金輦鳳翼不復北。龍衰永委穢草藏。延喜芳闕終奚若。誰使股肱殲鋒銳。按劔若在中興日。皇猷更於延喜光。後羅開帝陵

其七

急難東關與依附。獻功南嶽獨零了。行人千歲問遺跡。一紙移文漸鴟鴞。源右將移文蓋

今山僧討豫州也。

其八

巨巖對成岸。溪澄藍色青。上有藤蘿梁。踏之上崢嶸。一甍巖上坐。幽興樽可傾。烟樹封四嶺。秋氛入衣輕。地僻而流直。曷得宮瀧名。土人欲答我。眉目愁先生。列聖昔遊幸。離宮幾經營。溪東昔多險。激流奔轟々。幸絕宮廢滅。險刃流夷平。景逝物又換。千載名空成。聞之吾意悵。陵谷心更驚。求宮與瀧處。處所且不明。人物咸非舊。焉問昔時情。感極隱巖臥。唯風大古聲。宮瀧

其九

客中爲客向天涯。日住翠微搜勝遺。憶起家山吟嘯夕。泉聲猿叫雨如糸。感懷

寶滿寺

更漏沈々夜二更。椀茶樽酒慰羈情。應談漸熱心清澈。一點燈花墜有聲。

金剛山

突然奇巖入雲危。落葉悲風向晚滋。憶看楠公北伐日。幾群騎馬捲塵馳。

其二

夾路琅玕或翠松。且披且步且從容。時聞梵唄雲間起。知是峯頭又有峰。

和歌浦

翠接高百尺。亭午好登臨。看覺新痕漲。泊舟出柳陰。

其二

數聲疎磬響雲山。十里海光一目間。幽趣未逢如此好。高帆斜帶夕陽還。

其三

楓林轉入翠微間。眼目豁然好解顏。天與海潮青一色。鶴聲遙度夕陽山。

其四

一痕團月出山東。萬里海光碧接空。岸樹多邊烟未滅。縹緲舟過有無中。

牛瀑

霜寒景多處。來投古梵宮。路從石腹入。人往雲烟中。山翠連丹宇。瀑流映碧欄。幽人求句切。不識夕陽紅。

其二

醉歌聲歇冷金風。忽見西山返照紅。客舍豪華何處覓。賞幽獨立白雲中。

岸和田偶成

飄泊紀和絕勝地。月餘未嘗對書床。歸心日切知何事。歸得京師亦異鄉。

紀藩某請水哉軒納涼詩

水哉軒上坐飛觴。殊覺夜深幽趣長。月上梧桐風不定。清陰碎作滿庭涼。

岸元恒請拙書為錄舊製

晚向銅駝橋畔過。浮烟籠柳綠如螺。半川猶逗斜陽在。瞥看香魚飛出波。

鹽內子與請同前

不睡漸知更漏加。趁風獨步小池涯。滿庭涼月光如練。閑數牽牛帶露花。

林氏囑同前二首

炎蒸晚不收。為上最高樓。銀漢清風起。微雲逆月流。汲取前江水。新茶試鼎烹。夜深眠不得。檐角月斜明。

送林秀才之江戶

騏驎今朝離絆羈。瞬間千里又何疑。前途悠遠須珍重。失足無非快意時。

附錄 諸家詩文

渡邊弗措先生碑

重野 成齋

丹波篠山有儒者曰渡邊君諱世順字伯信號弗措幼好讀書上口即成誦十五遊京師從猪飼敬所學敬所甚愛之視猶子大鹽後素每詣敬所置千座發疑試之君應對審敏後素大嘆賞丹波守福井氏多藏書常就讀之業益進敬所說經於縉紳家有事故必使君代往踰十年歸藩侯命往學昌平費與四方才俊周旋時出歷遊諸國伺察時勢幕府末造天下多事君為人雅澹疎放不屑世故一旦絕念功名歸藩下帷教授遠近響應絃誦之聲遍都邑為藩學教官兼侍講後進督學兼郡宰藩主靈源召特敬重之君說經循々遵舊說而出入古今貫穿百家融會浹洽歸於大中故聽者鑿足淡于利欲其在江戶人勸以重祿仕他藩君面折不肯但應諸侯招往講經會藩召君還橐空不得上途人又勸告別諸侯獲贖必多君笑曰吾不堪煩勞遂典衣物不告而發平生著作哀然成帙一夕罹災蕩盡君絕無愛惜色其意謂雕蟲末技何足介懷後有意再作而遂不果交遊皆一時名碩佐藤一齊嘆曰不

意篠山小藩而有此儒者也余在昌平與君同學倏忽三十餘年不得復相見方今儒學大衰如君存於一方足以強人意而今又亡之可不惜哉君遊攝州神戶居一年得病明治十八年三月十日卒年六十八葬湊川西門人建碑篠山王地山面雲川雲川丹之巨浸君在神戶思鄉曰吾當為雲川漁夫因相此地請余記碑陰考諱世敏妣長澤氏有至性事父母奉養備至居喪哀毀骨立觀者泣下娶笑原氏生五女無嗣養平野市兵衛子配長女為後名世誠先死孫朔太郎農家

展渡邊弗措墓

余之入茗齋弗措先在評余文曰時無英雄使豎子成名弗措長余十歲左右云會將豎子批吾文豎子頭毛已白紛不得一樽重細論隻雞斗酒吊孤墳

弗措精舍說

菅野 白華 名深字聖與備白華姬路書院

篠山藩士渡邊伯信名其所居曰弗措精舍使予作說予曰人唯有勇也故學問之道成矣若夫無勇者小學而大遺有始而無終鹵莽滅裂玩愒日月以至搔白首于窮廬也甚矣勇之不可已也一旦立志不撓困衡能忍是乃勇之事而詩之就將書之日新子與氏之所謂養氣皆是已人有三德知仁勇而知仁實成於勇矣傳有之

曰。博學之。審問之。慎思之。明辨之。篤行之。五者非要其成。則弗措也。人一能之。己百之。人十能之。己千之。果爾則愚者必明。柔者必強。而未嘗不造於道也。知仁之所以成於勇。其在於茲乎。是乃弗措之說也。今士辭親戚。離墳墓。負笈千里之外。單衾孤燈。咬菜根。而挾蠶冊。自謂爲勇也。雖然奔走廣途。浸漬華俗。不至眼醉魂蕩。以喪其志氣者。殆亦鮮矣。幸而不入汙俗。兀々然。僅能修期月之業。自以爲弗措也。及其歸。則不諉之于俗。兀蜩集。即藉口于邁齡頹日。或翹然磔眉坐。阜比。自安小成者。亦不足與言勇也。伯信果有見於此乎。弗措之義。宜自擇也。伯信在茗甕。听經夕。史枕詩藉文。欲然居業有年於茲。其志迥殊乎庸儕者。予固知之于今日矣。不知他日尙能繼之乎否。說成而伯信歸。

送渡邊伯信還篠山

句々叙別恨。依依々流眄孤呻倚靜扉。葉盡溪頭秋亦去。寒烟落日送君歸。

跋

不肖以弗措先生曾孫。入承其後。日夜戰兢。有辱家名。是懼。頃者藉先輩諸君盡瘁。其傳記遺稿成。不肖雖力不加之。其成偶在不肖繼世時。得以傳之於天下後世。不肖心如自爲之者。窃不勝欣喜也。惟至先生傳記遺稿。文獻不備。其編輯極難。而今完成如此。以能不朽之。是全出先輩諸君熱誠之力。而不肖亦享其餘榮。不啻先生靈領于九原也。乃辨其由。以深謝諸君之高誼云。

大正壬戌五月

曾孫 不肖 渡 邊 望 謹識

附記

弗措翁ノ我舊藩學政ヲ督シ子弟ヲ薰陶セシ功績ノ偉大ナルハ人ノ知ル所ナリ其歿後已二年所ヲ經テ門弟子ノ現存者今ヤ實ニ寥々タリ弟嘗テ王地山ニ登リ翁ノ墓ニ展ス地偏シ碑小ニシテ人目ニ觸レ難ク香花全絶ヘテ蔓草茫茫其凄慘觀ルニ忍ヒス是ニ於テ感慨無量遂ニ墓碑修理遺稿編纂ノ志ヲ起ス然レトモ一人ノ力能及フ所ニアラス以テ翁ノ姻戚且高弟ナル箕原貞明氏ニ謀ル氏喜テ賛同ス依テ先遺稿資料集蒐ニ着手ス其後氏病ニ罹リ久シク癒ヘス遂ニ此事業ヲ舉テ關遂軒先生ニ委囑ス爾來孜孜編纂ニ務メラレ草稿全成リテ其上梓ヲ見ルニ至

ル

翁晚年首丘ノ情切ナリ弟等胥謀リ郷閭ニ迎ヘントシ準備已整フ偶不慮ノ障碍ニ會シテ果サス翁ハ竟ニ兵庫ニ客死セラル想フニ在天ノ靈來リテ長ヘニ王地山ニ髣髴徜徉セラルベシ是弟ノ斯業ヲ發起シ涓滴ノ力ヲ致シ師恩ノ萬一二報セントスル所以ナリ今ヤ遺稿編纂ノ事畢ル續テ修墓ノ業ニ移ラトスルニ當リ箕原氏已ニ隔世ノ人ト爲ル遺憾曷勝ヘン然レトモ氏已ニ金聲ノ唱ヲ爲シ遂軒先生之ヲ玉振シ以テ其志ヲ成ス氏以テ瞑スヘシ乃其由ヲ卷末ニ附記シ併セテ遂軒先生ノ勞ヲ謝スト云

大正十一年五月

門人 塚 協 門 藏 謹識

辨別外生傳及通稱

大正十一年六月九日印刷
大正十一年六月十二日發行
（非賣品）

大正十一年六月九日印刷
大正十一年六月十二日發行

（非賣品）

編輯者 關 德

東京市赤坂區表町三丁目十六番地

發行者 渡 邊 望

東京府北豐島郡西葉町字池袋五百廿六番地

印刷者 松 澤 玨 三

東京市麴町區下六番町十七番地

印刷所 同 勞 舍 活 版 所

東京市麴町區下六番町十七番地

電話九段三六九番

11
573

新編外傳通志

大五十一
...

終

